いだてん 韋駄天の記

劇作家 岡部耕大 ㊳

地家者に誇りあり

松浦には地家者という言葉がある。生粋の土地の人間という意味である。江戸っ子も3代目からを江戸っ子というそうである。地家者にはそれなりの誇りがあるようだ。地家者は気付いてはいないかもしれないが、誇りは責任感を伴っている。同級生の吉本務さんもそうである。

もう、松浦には家も墓もない人がいる。集団就職をした同級生もそうである。たまたま松浦に炭鉱があったから、親に連れられて来ただけである。しかし、少年時代を過ごした土地である。懐かしくなるのは当然である。だれもが吉本務さんに連絡をする。吉本務さんは嫌がらずに同級生を案内する、らしい。昔、同級生が住んでいた不老山炭鉱の長屋跡、同級生と泳いだ大浜の海水浴場、遠足に行った合戦原。昼食はラーメンだそうである。

松浦に名物はないが、「麥竹林」のラーメンはうまい。松浦ならではの味である。少年時代に麥竹林のラーメンの味を知った人は、生涯舌に残るらしい。平戸には飛び魚のラーメンがある。これも癖になるらしい。飛び魚はあごという。あごだしラーメンである。唐津や伊万里から車を飛ばして食べに行く人もいる。その人たちには、麥竹林のラーメンと食べ比べをしてもらいたい。甲乙付け難いはずである。

地家者にはもう一人、石橋純子さんがいる。これも旧姓である。校長先生だった人の娘でよく勉強をしていた。なにも校長の娘だから勉強したのではなく、勉強が好きだったからである。このタイプはどこの学校にも一人はいる。学校の先生と結婚して、ずっと松浦で過ごしている。「そこに生まれて、そこに生きて、そこで死ぬ」。幸せはそこにある。

この人も、地家者としてよく同級生の面倒をみている。同級会の幹事は吉本務さんと石橋純子さんである。近頃の同級会にはよく人が集まる。人生が一段落したのである。京阪神からつえをついてやって来る人もいる。

高校の同級会はまだライバル意識が残っていて、会話も緊張する。笑いながら緊張している。

「おいも社長までもなった男やっけん」。いわずもがなである。中学の同級生は素直にわたしを賛辞してくれる。「テレビ見たばい」「映画、ええやんか」。関西弁が交じっていることもある。苦労は若いうちにしたほうがいい。老いてからの苦労は疲れる。同級会も、やがては開催されない日が来る。

「妻をめとらばオたけて　顔うるわしくなさけあり　友をえらばば書を読んで　六分の侠気四分の熱」。与謝野晶子の夫、与謝野鉄幹の「人を恋ふる歌」である。鉄幹は「人間には左の五つの人気がなければ駄目だ」といっている。勇気、剛気、侠気、労気、才気である。労気とは労働意欲か。与謝野晶子と鉄幹は大胆かつ奔放であった。「みだれ髪」である。

（松浦市出身）

おかべ・こうだい　1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。